

第1回球磨川水系の治水に関する客観性検討委員会 議事録

【1】開催日時 平成13年8月21日(火) 9:30～12:00

【2】開催場所 ホテルセントラーザ博多 3F 橋の間
福岡市博多区博多駅中央街4-23 TEL092-461-0111

【3】出席委員(敬称略)

(学識経験者)

大本 照憲	熊本大学工学部助教授
小松 利光	九州大学大学院工学研究院教授
下津 昌司	元熊本大学教授
杉尾 哲	宮崎大学工学部教授
橋本 晴行	九州大学大学院工学研究院助教授

(行政関係者)

望月 達也	国土交通省九州地方整備局河川部長
工藤 啓	国土交通省九州地方整備局河川調査官
中島 一見	国土交通省九州地方整備局八代工事事務所長
塚原 健一	国土交通省九州地方整備局川辺川工事事務所長

【4】配付資料

1. 議事次第
2. 出席者名簿及び座席表
3. 委員名簿
4. 委員会規約
5. 情報公開について
6. 治水の説明に係る課題について
7. 参考資料

【5】議事次第

1. 開会
2. 挨拶(九州地方整備局河川部長)
3. 委員紹介
4. 委員会規約について
5. 委員長選出
6. 委員長挨拶
7. 議事
 - (1) 球磨川水系の治水計画並びに治水の説明に係る課題について
 - (2) 昭和40年7月洪水について
 - (3) 川辺川ダムのご操作について
 - (4) 審議
8. その他
9. 閉会

【6】議事内容

1. 委員長の選出(全会一致の意見として) 小松利光 委員
2. 委員会の規約について
全会一致で原案のとおり認める。

3. 情報公開について

公開の条件として

- ①報道関係者について公開とする。
- ②内容によっては、非公開とすることもあり得るものとする。
(プライバシーに係わるもの等情報公開にそぐわぬ議題が想定される場合)
- ③報道関係に対しては、プライバシーに係わるものについては発言者を特定しない報道を求める。なお、発言者は発言前にプライバシーを守る措置を講じてもらうよう報道機関に要請するとともに、委員長は委員の発言後、プライバシーを守る措置を講じてもらうよう報道機関に要請、確認する。
- ④撮影は議事進行の妨げにならないようお願いします。
- ⑤資料は報道関係者に配布する。
- ⑥後日議事録をホームページ等で公開する。(http://www.qsr.mlit.go.jp/kawabe/)

4. 球磨川水系の治水計画並びに治水の説明に係る課題について

- ・代替案比較表には短所と長所を併記した方が一般の方にわかりやすい。
- ・本委員会の目的にはそぐわないかもしれないが、代替案比較要素として環境に対するミチゲーションという観点も必要ではないか。
- ・遊水地案とトンネル案の組み合わせやダム案と遊水地案の組み合わせなど、代替案の組み合わせについて検討されているのであれば記載すべき。
- ・ダム案と他の手法とを組み合わせるとダムの規模を縮小できるが、現実的に可能なのか。
- ・単位図法の概念図については、初期損失以降の損失雨量等の取扱いが判りづらいので修正すべき。
- ・球磨川上流域の改修計画は、昭和22年頃は霞堤であったのに昭和41年頃には連続堤での改修へと変更されている。この背景には地元の要望があったはずだと思う。このような経緯を記述すべき。遊水地案が地元を受け入れられるのかということが連想できない。
- ・自然遊水地案の面積が、川辺川ダム事業について(平成10年7月)(以下白パンという)に記述している270haから200haに変更になっているが変更になったのであればその理由を記述するべきである。また、白パンに記載している遊水地案の面積1,000ha、深さ7mの根拠の説明が必要。
- ・洪水調節操作で800m³/sから200m³/sに絞り込む理由については、その必要性を明示すべき。一般の方は、本川流量(1,200m³/s)と川辺川流量(200m³/s)の合計だけを考えてしまい、残流域の流量などは見込まないため、こんなに貯留しなくてもよいのではないかと誤解してしまう。
- ・基本高水のピーク流量の比較については、単に比流量のみで比較するのではなく、流域の形状を踏まえた比較を行うべきである。
- ・一般的に洪水流出に関しては、流域の地質との関係も大きいと思われるため、地質が近似した河川との関係を整理すべき。特に中・古生層の地質は直接流出が大きいと認識している。
- ・河床掘削案の影響については、瀬や淵の消失や河川環境への影響を一番に記述すべき。
- ・治水安全度1/80の説明が解りづらく、一般の方の理解を得にくい。確率の説明を解りやすく工夫すべき。

5. 昭和40年7月洪水について

- ・市房ダムについて説明する場合は、まず「ダムが無い場合」「ダムがある場合」の水位を比較して説明すべき。次にダムの操作を説明した方が解りやすい。
- ・昭和40年以前の主要洪水における主要地点の降雨量を示し、昭和40年7月洪水が「今までに経験したことのない大雨」であったことを説明すべき。
- ・地盤高と家屋の高さの関係を示すなど実感できる形で水位グラフを表現できると一般の方に解りやすい。

6. 川辺川ダム の 操作について

- ・計画規模を超える場合のダム操作の図について、ハイドログラフの①ダムの水位が上昇する範囲は、貯留を始めてからに修正すべき。
- ・同ハイドログラフと①～④までの操作イメージはセットで示さないと誤解を与える。
- ・流入量と放流量の連続式が一般の方には解りづらいので工夫が必要。学生に例えると、親からの仕送りと消費と貯金残高の関係に例えるなど。

7. その他

- ・洪水が起こった昭和 40 年以前の森林の保水能力を評価しておくべき。参考資料のデータにも昭和 30 年代のデータもプロットすべき。
- ・森林の保水能力を表すグラフについては、その計算手法の説明が必要。
- ・既往洪水の一覧における死傷者、行方不明者の数は、土砂災害を除いたものにした方がよい。
- ・過去の洪水の降水量の時間分布グラフについては、同スケールにした方が一般の方に解りやすい。

8. 事務局より

- ・昭和 40 年 7 月水害体験者等のヒアリングを実施したいので、大本委員に立会をお願いしたい。

9. まとめ

- ・今回の各委員の意見を踏まえ、事務局において資料の修正等を行い、次回委員会で検討する。
- ・次回委員会は、平成 13 年 9 月 6 日の午前とする。